

鎌倉時代庭園の研究

はじめに 文化遺産部遺跡整備研究室では、庭園に関する調査研究をおこなっており、2011年度からの第3期中期計画においては、中世庭園の研究に取り組んでいる。これは第1期中期計画(2001～2005年度)における奈良時代までの庭園の研究、第2期中期計画(2006～2010年度)における平安時代庭園の研究の流れを引き継ぐものであり、5年にわたる中期計画の1年目にあたる2011年度は鎌倉時代の庭園を対象とした。

鎌倉時代に先立つ平安時代は、様式としての寝殿造庭園や浄土庭園が成立し、それまでの庭園文化が「日本庭園」として確立してゆく時代である。寝殿造庭園は、皇族や貴族等の住宅につくられた庭園で、主に儀式や饗宴の場としての機能を持つ。現存する遺構はないものの、その様子は貴族の日記等からうかがい知ることができる。また、日本最古の作庭書である『作庭記』には、寝殿造庭園の意匠や作庭技術が書かれており、その内容は近年の発掘調査によって検出された遺構からも裏付けられている。一方浄土庭園は、10世紀半ばに、増大する社会不安を背景とする浄土信仰や末法思想の流行の中で、阿弥陀堂と一体的につくられた園池のことを言い、平等院庭園等の例が現在まで残る。浄土庭園は貴族が自らの極楽往生を祈るための場としてつくられたが、園池の意匠は寝殿造庭園を基盤とするところが多く、その意味で寝殿造庭園の変型とも考えられる。さらに、平安時代は京都を中心とする庭園文化が遠く離れた地方にまで広まった時代であり、奥州平泉の毛越寺庭園等にその影響を見ることができる。

鎌倉時代に続く室町時代は、禅宗の影響の下、庭園文化が新たな展開を見せる時代である。禅僧夢窓疎石によって天龍寺や西芳寺等の庭園がつくられ、室町幕府三代将軍足利義満は、西園寺家の山荘北山第を入手して改修をおこない、北山殿(現在の鹿苑寺)とした。また、枯山水が1つの庭園様式として確立され、後の庭園文化に大きな影響を与えた。

平安時代庭園については、『平安時代庭園の研究』(森蘊、1945)や『寝殿造系庭園の立地的考察』(森蘊、1962)等が、また室町時代庭園に関しては、『室町時代庭園史』

(外山英策、1934)等の研究があり、古くから文献史料を中心に研究が進められてきた。さらに昨今では、発掘調査の結果から新たな知見が得られている。

鎌倉時代は、庭園史上大きな特徴を持つ平安時代と室町時代の間位置し、庭園の様式の変遷や庭園文化の地域的な広がりを知る上でも重要な時代であると考えられるが、現存する庭園遺構は少なく、庭園に関する史料もあまり研究されていない。近年では発掘調査等による成果も上がっているものの、まだ十分とはいえない状況である。

そこで、2011年度は鎌倉時代の庭園を取り上げ、庭園史の枠にとらわれずに様々な観点から考察し、その庭園史上での位置をあきらかにすることを目指した。

研究会の開催 2011年度における鎌倉時代庭園の調査研究として、具体的には、2011年10月29日に『庭園の歴史に関する研究会』を開催した。テーマは「鎌倉時代の庭園—京と東国—」とし、時間的観点と空間的観定の双方から鎌倉時代庭園について考察し、時間的観点からは京都における平安時代庭園と鎌倉時代庭園の関係について、空間的観点からは京都の庭園と東国の庭園の関係をあきらかにすることを目指した。

研究会には庭園史学・造園学の研究者のほか、考古学、文献史学、美術史学、建築史学の専門家が参加し、さまざまな角度から鎌倉時代庭園について検討した。前半は各分野の研究者が研究発表を、後半はそれらの発表を踏まえて討議をおこなった。

以下に研究会の概要を示す。まず「鎌倉時代の文化財庭園」について、奈良文化財研究所の青木達司・平澤毅が説明をおこなった。ここでは、鎌倉時代庭園のうち、現在名勝指定されている庭園および発掘された庭園遺構等について概説した。

続いて各分野の7名の研究者による発表がおこなわれた。まず、鈴木久男氏(考古学:京都産業大学)の発表「発掘された鎌倉時代の京都の庭園(西園寺家・北山殿を中心として)」においては、鎌倉時代初期の西園寺家の山荘に関して、発掘調査の結果や地形等から、庭園の地割や主要遺構の復元がおこなわれた。西園寺家の山荘は室町時代に足利義満によって大きく改修され、義満の死後鹿苑寺となる。鈴木氏の発表は、義満による改修以前の姿がよくわかっていなかった西園寺家の山荘について、新た

な知見を示すものであった。

続く豊田裕章氏（文献史学：京都大学人文科学研究所共同研究員）の「水無瀬殿の総合的研究」では、鎌倉時代初期に後鳥羽上皇が造営した水無瀬殿（水無瀬離宮）について、その時間的・空間的変遷が、文献や現在まで残る地形等から総合的に示された。

塩出貴美子氏（美術史学：奈良大学）の「鎌倉時代の絵巻に描かれた庭園」では、絵巻に描かれた庭園を史料として見る場合の、そこに表現されている時間と空間の捉え方が示され、また絵巻の「全体」と「部分」の読み解き方についても論が及んだ。

高橋知奈津（造園学：奈良文化財研究所）の「鎌倉初期の風景表現と作庭」においては、鎌倉時代初期の風景と障子絵の関係、障子絵と庭園の関係が示され、平安から鎌倉への過渡的な状況が論じられた。

大澤伸啓氏（考古学：史跡足利学校事務所）は「関東における鎌倉時代前期の庭園」と題した発表で、樺崎寺跡等の関東の庭園遺構における伽藍配置や意匠の変遷をあきらかにした。

秋山哲雄氏（文献史学：国士舘大学）は「文字史料に見る鎌倉の庭園」という題で、『吾妻鏡』を中心とする文献史料から鎌倉の庭園の様子をあきらかにし、その立地、地割、構成要素、建物の配置等について考察した。

玉井哲雄氏（建築史学：国立歴史民俗博物館）は、「建築史における鎌倉時代、そして庭園」と題した発表で、まず建築史において鎌倉時代を考える場合の視座を論じ、次に日本だけでなくアジアまでを視野に入れて広域的に考えることの必要性と、研究分野を限定することなく、建築史、庭園史、都市史を一体的に捉えることの重要性を指摘した。

各分野の研究者の発表の後には、発表に対する質疑応答と総合討議をおこなった。この討論では発表者のほか、造園学、庭園史学、文献史学、建築史学、美術史学の専門家が意見を述べ、鎌倉時代庭園の時代的特徴と地域的特徴について討議した。

まず、「京都における平安時代の庭園と鎌倉時代の庭園の違い」が議論された。平安時代庭園との連続性に関しては、豊田裕章氏より、水無瀬離宮は周辺地域の景観を庭園とするような思想にもとづいて造営されており、その点で鳥羽離宮等の平安時代庭園と連続性が認めら



図27 研究会総合討議の様子

れ、またそのような平安時代との連続性とともな鎌倉時代後半～室町時代へとつながる新たな展開への因子が見られることが指摘された。そのほかにも、庭園史や建築史における平安時代から鎌倉時代への転換点や、建物の配置や庭園との位置関係、また「庭園」を意味する語等について、意見が交わされた。

もう1つの大きなテーマである「京都の庭園と東国の庭園の関係」については、東国の庭園の模倣性と独自性が議論されたほか、ここでも建物と庭園の位置関係に話が及んだ。

取り上げられた事例に限りがあったこともあり、この研究会によって鎌倉時代庭園の全体的な性格および庭園史上の位置を結論付けるところまでは至らなかったが、課題や今後の研究の方向性・方法論が示されたことは意義があったといえる。

今後の展開 鎌倉時代に禅宗が伝えられ、様々な分野に影響を与えたといわれている。庭園の分野でも禅宗の影響は大きく、鎌倉時代から室町時代には、新しい様式の庭園がつくられてゆく。今後はそのような時代背景なども考慮に入れながら、禅宗と庭園、足利將軍関連の庭園を中心とする室町時代の庭園、戦国時代の庭園文化等に焦点をあてて、中世庭園を様々な角度から考察する予定である。

（青木達司）

参考文献

- 小野健吉「庭園の系譜」森本幸裕・白幡洋三郎編『環境デザイン学—ランドスケープの保全と創造—』朝倉書店、2007。
- 小野健吉『岩波日本庭園辞典』岩波書店、2004。
- 仲隆裕「平安時代の庭園」武居二郎・尼崎博正監修『庭園史をあるく』昭和堂、1998。